

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

分かれ道

高野 冷子（青山台 在住） 1940年生

昭和20年8月、私は4才で満州新京に住んでいた。両親共、福島出身。父は満州鉄道に勤めていたが、召集軍人となっていた。

「お母さん、ご近所の人々が皆、お留守になってしまったわ。お隣のお庭のトマトが真赤になってる。」と言う私に「後で、いただきますよね。」と母が答えた。「変だなあ、他のトマトを黙ってもらうの？」こんな話をしていると、軍服を着た人達が突然馬車で来て「今なら、まだ間に合う。満鉄社員最後の引揚げグループの家族として、何としても行ける所まで行ってください。」と半分命令的だったらしい。父の上司で、関東軍の人だった。

「長兄が小学校2年、次兄が1年、そして私、2才の弟と10ヶ月の乳児の5人の子供を、母1人でどうやったら連れて帰れるのだろう。途中で離ればなれになるのであれば、皆一緒に潔い最期を」と母は決心していたと後で聞いた。当時、両親共、何の疑念もなく、時勢にあった生き方だったのではないだろうか。命令という言葉と5人の子供の命が母の気持ちを動かしたのか、行ける所まで行こうと、私達は引揚げグループの一家族となった。

母は31才、小柄で華奢な背中に、弟2人を並べて背負い、右手に私の手を引き、左手におしめの包をぶら下げ、貴重品とささやかな荷物は、長兄と次兄に背負わせての突然の出発だった。

グループの集団移動は鉄道、宿泊は小学校、神社、お寺などだった。長兄が母を助け家族のため、周囲の大人達に混ざり、お買物や、連絡係など、本当に父親代わりをしてくれた。乗り物以外の移動はいつも夜中で、日中は大人顔負けの長兄だが、夜中に起こされる度、夢から覚めにくく、その都度母は、2人の兄達を目覚めさせるのが大変だったらしい。その時も夜中の移動で、母はいつも以上に2人の目覚めにずい分時間を要した。

そして母は背中に2人を背負い、私の手を引き、おしめを手に兄達と外に出た時は、皆が出発してから、大分時間が経っていた。外は生憎の大雨、真暗な中の一歩道が果てしなく続き、行けども行けども先は真暗、急に道が2つに分

かれた。私達以外、誰もいない。母は右か左か、本当に暫くの時を途方に暮れて祈ったと言う。

母の実家は、代々神主、そのご先祖様方、八百万神々、いや宇宙の造り主の神だったのかも知れないけど、ひたすらに祈ったと言う。そして決めた道を、兄2人と私も母と歩いたのだが覚えていない。それは遠い遠い道のりだったと。真暗の中、前方が少し騒がしく私達家族の名を呼びながら来る人影が見えた。母の選んだ道が正しかった。先着の人々が、私達家族が居ないのに気付き、迎えに来てくれたのだった。もしもう一方の道を進んでいたら、今の私は居ないし、日本に戻って来られなかったと思う。

母の握る手に力が入った。暗くコンクリート敷の広場をそろりそろりと押されながら歩く足元がつかずいた。母が言った。「冷子ちゃん、足をしっかり持ち上げて歩くのよ。ここで転んだら、後の人々に踏みつけられて死んでしまうから!」。今つかずき踏みつけたのは、人間だったのかも知れないと、私は今でもあの感触を忘れられない。

進むほどに屋根がなくなり、薄暗い中に、ボーッと船体が見えた。と同時に、ドボン、ドボンと間隔を置いて3回聞こえた。「絶対にお母さんの手を離してはだめよ。これからお船に乗るけど、あわてないで、気を付けて!!」。釜山港を後に、船の中で、先ほどの水音は、乗船の際、海に落ちた人の音だと話してくれた。

私達は無事、日本に帰り着いた。山陰線、東海道線、常磐線と乗り継ぐ度に、5人の子供を連れた若い母親を見て、兄達と私を兵隊さん達が、列車の窓から乗せてくれたり、真っ白いおにぎりを分けてくれたりした。満州からの引き揚げと聞いてのことだ。母の実家にたどり着いたのは、終戦直前だった。私はその後1週間眠り続け、お医者さんは、衰弱がひどいので危ないと言ったそうだが、祖父母、母の優しい心に包まれ、すっかり元気になった。

終戦翌年、父は、ソ連連行をまぬがれ帰って来た。その後1人の弟が生まれ、6人の子供を育てた両親は本当に、大変だったと思う。大勢の人々、そして母の強い愛情と兄達に守られて帰って来られた事を思うにつけ、その後、病弱に過ごした父母だったが、思い残すことなく看病が出来た事、又縁あって、1人

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

の娘が生まれた事で、恩返しが出来たかと思っている。父母、2人の兄、2人の弟も60代でこの世を去った。満州での正しい思い出話をしてくれる人は誰もいない。

戦後70年という節目の年

高橋 君江（つくし野 在住）1934年生

あの忌まわしい戦争を体験した年齢層が少なくなったということで、我孫子市の「戦後70年・我孫子市平和都市宣言30年記念誌」に原稿を書かないかと薦められていましたが、原稿を書く事の重みを感じながら、中々筆が進みませんでした。あの忌まわしい悲惨で不幸な戦争を体験し、それは忘れもしない、2時間で10万人の都民が死んだ東京下町に空襲のあった日の事を、辛いあの日の事を思い出せば出すほど涙が止まらず、筆を止めてしまうのです。私は今年81歳になります。あの戦争の記憶の風化が懸念されている昨今、ほとんどの若者世代は戦争のなんたるかを知らない世代ではないでしょうか。それではいけないと、私なりに戦争体験と記憶を記述したく思い、涙をふっ切ってここに筆を執る事にしました。

昭和19年の年の暮れ頃あたりから、戦争の影響が色濃くなって来たのを感じました。私が小学校3年生の時の事です。此の年、軍の要請で国が学童疎開をするように学校は進められました。小学1年生から6年生の内、今、戦局の悪化する前に学童達を安全な場所に疎開するように勧めたのです。そうして集団疎開が始まりました。今でいう、安全な場所に避難するということです。私達はクラスごとに分かれて、電車に乗って、千葉県東金市の県立東金高等女学校に疎開(避難)し、約1ヵ月間両親と別れ、集団生活が始まりました。その後、両親の強い意向で集団疎開先から東京へ連れ戻しましたが、間もなく親元から引き離され、再び小学2年の弟と一緒に山梨県山梨市のブドウ、桃等を栽培する果樹園農家である母の実家に、昭和19年4月10日、再び親の強い願いで縁故疎開を余儀なくされ従うことになりました。子供なりに本当に戦争は残酷

で非情だと思ったものです。私とまだ小学3年生の弟と、伯父の家族と一緒に5ヶ月間過ごしましたが、地方の田舎はどちらかというところ、戦争とは無縁で、切迫感のない、のどかな雰囲気のある農村の風景があり、そこでの日常生活がありました。その頃、両親の居る東京は、毎夜B29の焼夷弾爆撃の攻撃にあい、都民は恐怖のどん底にありました。昭和20年3月10日未明に、史上最大の東京大空襲で、東京の下町一帯は狙いうちをされたかのように、10万人以上の都民が、一夜にして苦しみ亡くなっていったのです。現在我孫子市の人口は13万2970人ですが……。これは広島、長崎の惨事と同様、人類史上最大の虐殺だったと表現しても、大袈裟ではないと痛感しています。

今は美しい水の都と言われている隅田川界隈は、スカイツリーがあり、花火大会、桜並木と憧れの街です。戦争の惨禍で10万人以上の犠牲者を出したとは、想像出来ない程の素敵な街並みです。実はその隅田川で、70年前の東京大空襲の戦火の中を生き残って壮絶な体験をしたのが、私の父と兄です。私の実家は、東京都中野区にあり、当時は、山の手独特の雰囲気がある街並みでした。その頃3月10日の未明に、父と次兄は、何処をどうさ迷っていたのか、下町の東京大空襲の真ただ中に居たのです。余り多くは語らない父でしたが、当時父は、東京日本橋にあった、白木屋デパートの電気技術者として勤務しており、18歳の次兄は、日立製作所亀戸工場に勤務していました。入社して1年未満でした。父や次兄の話では、東京大空襲のあった前日9日は雪の降る寒い日で、翌10日未明にB29爆撃機が、雨アラレのように焼夷弾（爆発力より、燃やす目的の爆弾）を投下し、折からの強風に煽られ、30分も経たないうちに、下町中が火の海になったそうです。その頃父と次兄は、何処をどう逃げていたのか火の勢いは物凄く、余りの熱さに耐えられず、隅田川に向かって逃げ、オーバーを着たまま隅田川に飛び込んだそうです。当時小学校5年生の私は、ずぶぬれになって帰宅した父と、2日後に帰宅した次兄の姿を見て今でも、その様子が脳裏を離れません。父と兄はあの日の壮絶な生と死の戦いを悲惨にも体験していたのです。大勢の人たちが、後からどんどん飛び込んでくる様子は、正に地獄絵の様相で、40度近くになっていた隅田川の水温の中、「助けて下さい」「助けて下さい」と叫ぶ女性や子連れの子どもの声、死と闘っていた多くの男

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

性の最後の声が耳に残ったままの父にとって、その後もずっとそのトラウマに苦しんでいたようです。

身近に、戦争の悲劇、悲惨さを体験した人が少なくなっていく事の怖さ、忘れられる事の無責任さ、此の歴史的事実を、後世に伝えていくことの大切さを痛感しています。そして、私達が戦後勝ち取った言論の自由と、表現の自由をこれからも守っていかなくてはとの思いです。我孫子市は、「戦後70年・我孫子市平和都市宣言30年」の節目の年にあたり、この悲惨な経験を語り継ぎ、平和について考えて行くその姿勢は、実に高邁こうまいな素晴らしい取り組みだと思えます。私達戦争の体験者は、2度と戦争を起こしてはならないと固く誓いたいと思えます。

特別攻撃隊

田中 三也（並木 在住）1923年生

昭和十九年六月、史上最大といわれたマリアナ沖海戦のあとも米軍の勢いは衰えず、十月には台湾沖へ続いてフィリピン沖へと侵攻し、これを迎え撃つため戦艦大和・武蔵ほかが出動、十月十八日に「捷しょう一号作戦」が発令されたのです。十二月二十日、特別攻撃隊の編成が行われ、私は彗星偵察機で急ぎマニラに向かう。基地では連日、特攻機が敵を求めて出撃し、六日間の攻撃で敵の空母四隻に損害を与えました。

ある日、予科練同期生の伊藤立政上飛曹が特攻隊にいると聞き、早速面会を求めました。「ヤァーヤァー、田中貴様まだ生きちよったか」と、三年前と少しも変わらぬ彼の陽気さに驚く。彼の心をゆさぶったであろう特攻への心情は、見る限りでは全く感じられませんでした（この時点で同期生の七割が戦死です）。当時の搭乗員達は、国に殉ずることは恐れないが、良い死に場所を望んでいたのです。

十月二十九日、彼は第二神風特別攻撃隊神兵隊として「九九式艦爆」六機で「直衛機」三機かいりに守られて、マニラの海岸道路を離陸、フィリピン東方百八十哩

の敵機動部隊へ向けて出撃し、「われ空母に突入す」と発信す。可愛いマスコットと共に^{そうれつ}壮烈な体当たり攻撃でした。自分の生命より重い“大義”があったからこそ純真な心で臨むことができたのでしよう。

ある時、帰ってきたばかりの零戦の搭乗員が機体の下にもぐり、針金で爆弾と投下器を縛り「これが二度と帰らぬ証だ」と、少々興奮ぎみで再び飛び立って行きました。どのようなやりとりがあったか不明ですが、特攻の意義の重さを見せつけられた思いでした。

マニラ基地への敵襲はますます激しくなり、飛行隊は^{キロメートル}八十 軒 北方のクラーク地区へ移動し、偵察隊はバンバン基地に陣を構えました。年が空けて一月四日、私は索敵に飛び立ち、西方海上に敵の大輸送船団を発見、打電し、了解電と同時に特攻隊の誘導指示を受けました。

小一時間ほどして、山並みを越え、親鳥を追うように飛び続ける一団を見つけた。行く手を塞ぐ戦闘機とレーダーを避けるため、海面を這うように進む。敵は近い。一団はその体型を大きく崩し、乱れた敵陣へ次々と突入を開始し、煙幕と砲煙で視界を^{さえぎ}遮られる中で数回の火柱が確認された。その^{すさ}凄まじさを感じながら帰途につく。基地には味方の機影はなく、すでに台湾へ移動したようでした。

翌五日、基地撤収と防衛陣地構築の指示があり、七日には基地の北方^{キロメートル}百二十 軒 のリングエンに敵が上陸し、南下中との情報を受ける。この時、残りの搭乗員に対して、敵中突破の転進が下令されたのです。

八日早朝、残留組と固い握手で別れ、数台のトラックと徒歩組で、フィリピンの北端のアパリ^{あきもや}へ向かう。別れを惜しむ喚声が朝靄の山々にこだまし、見えなくなるまで帽子を振り続けました。

偵察隊は仲間十七名と乗車しましたが、故障のため三日目から徒歩を強いられ、峠を越え、河を渡り、ゲリラと撃ちあい、野宿もし、飢えと病に耐え、肩を貸し手を取り励ましあいながら、ようやく十六日目に行程^{キロメートル}四百 軒 のツゲガラオ基地へ辿り着くことが出来ました。

着いたその日、基地では特攻隊の編成が行われていて、“偵察隊から偵察員を一名選出せよ”との命令でした。急なことであり、異様な空気と沈黙の時は流

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

れる。特攻は決して納得いく死に方ではないが、ここ三カ月の経験を思い返し、徐々に落ち着きをとりもどし、「よし、俺が行こう」と申し出ました。

出撃の杯を交わし、二百五十キログラム 匁の爆弾を確かめ、彗星爆撃機の後席へ乗り組み、零戦の準備を待ちました。一機がエンジンの起動が悪く、ついに攻撃を明朝に延期の命令があり、再び地面に立ちました。しかし、味気の無い時間だけが過ぎ、友の励ましも耳に入りませんでした。

その夜、寝付かれぬままに家族のことを考えていたとき、空襲の合図があって、飛行場に火の手が上がりました。駆けだした友が帰り「彗星がやられた」と叫ぶのを聞きながら、ただ茫然ぼうぜんとしていたようです。

翌二十五日、第二十七金剛隊指揮官住野中尉の零戦二機がリングエン湾の敵船舶への攻撃に向かいました。

私は、飛び去る機影の先頭を行く幻の彗星爆撃機を目で追い、見えなくなっても飛行場に立ちつくしておりました。

フィリピンからの最後の特攻隊でした。

母の懐の中での引揚げ

中川 傑雄（布佐 在住） 1944年生

平成27年の8月15日は戦後70年、私も70歳。毎年この日を迎えると、亡き母の言葉が思い浮かびます。

私は1944年8月に満州国ハルピン市近郊の地方官吏の家に生まれました。戸籍にも「【出生地】満州国龍江省龍江縣、【受理者】在満州国特命全権大使」と表記されています。正確な戸籍管理は日本人としての誇りと思っています。誕生当時、そこそこ裕福な暮らしをしていたようですが、終戦間際のソ連軍の満州国侵攻にともない、その生活は一変することになります。

いつソ連軍に襲撃されるかもしれない恐怖の中、母は1歳の私と6歳年上の次兄、10歳上の姉を連れ、隠せる貴重品のみ衣服の裏に縫い付け、ほとんど着の身着のまま徒歩と汽車を乗り継ぎ、引揚げ船で父母の故郷である北海道

に帰ることができました。

引揚げ船の待つ港までの移動中、母は、痩せ細って泣くこともできない寝たきりの乳児であった私に、空き缶にクギで穴をあけた即席のおろし金で人参をすりおろし、口の中に流し込んでくれたそうです。連れて帰ることのできない乳幼児を、中国の方に預けることができた人はまだ幸運の方で、涙ながらに自分の赤ちゃんを畑に捨てる人を数多く横目にしながら、必死に日本に帰ったそうです。徒歩の次兄は必死に泣くのをこらえ足を引きずりながら、姉は女であることを隠すため頭を坊主にし、そんな大変な状態での逃避行でした。母は時には貴重品を手放し、生きるために必死の知恵と懸命の努力で、故郷北海道に無事たどりつくことができたそうです。そして遅れて父と長兄も無事帰ることができました。

無事に帰国でき幸運でしたが、その後も苦しい日々が続くことになります。

帰国して父は保健所に勤務しましたが、私が5歳の時、通勤の途中事故で他界、それからの生活はどん底の状態でした。そのどん底生活の中、私は誕生後の大事な時期に栄養失調だったせいか体が弱く、小学生の頃は時々朝礼で倒れ、気がついたら保健室のベッドの上と、そんなことばかりでした。親戚の役場の人から生活保護を勧められた母は頑固に断わり、父の退職金と母の農家等の働きでの生活でした。この頃のことを私はよく覚えていないのですが、兄から聞いた話では、明日の食事にも困る中、母は心中をしようとしたが、子供たちが「死にたくない」と必死に懇願して思いとどまったそうです。

大変な生活ではありましたが、長兄は保健所のレントゲン技師、次兄は三井グループの会社の設計技師になり、高度成長期の波にのる形で生活も向上し、私は母や兄達のおかげで高校進学、就職することができました。家庭にも恵まれて、今に至るまでささやかな幸せを享受することができています。私の職業は食の「安全安心」を基にした団体職員でした。経理部長等を経験して定年後、友人の会社の経理の相談に応じたり、自治会の役員を引き受けたりと多忙な日を送っています。その幸せを感じる時同時に過去を振り返り、こう思うのです。

「戦争は悲惨だ。後の世代には絶対に繰り返してほしくない。そして、戦後

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

の復興は日本人のまじめさ、団結の強さ、諸先輩の努力であり、このことは後の世代にも引き継いで欲しい」と。

私の戦後70年

中村 公陽（青山台 在住）1934年生

父は枕崎市（鯉節の）、母は薩摩半島（鹿児島県）の吉利村（近くに、日本三大砂丘と呼ばれる鳥取砂丘・九十九里と並ぶ吹上浜砂丘がある）の出身。

私は、昭和二十年の終戦の時は国民学校（小学校）の五年生でした。昭和二十一年三月に台湾から吉利村に引き揚げ、小学六年生から中学二年生のまる三年間を過ごし、^{たべもの}食物不足とイジメにあいました。引き揚げ者の財産は手荷物だけ、父は布団袋を担ぎ、母は乳飲み子を背負い、私達子供、五年生、三年生、一年生はリュックサック一つずつ。現金は一人千円だけ（公務員の初任給の二カ月分くらい）。貴金属と宝石はダメ。幸い父は郵便局に復職。怖い父に一度だけ頬つぺたを張られたことがありました。母は優しく食物を探す名人で、いつも子供達の空腹を心配していました。吉利村は、明治の元勳 ^{たてわき}小松帯刀（西郷隆盛と大久保利通を育てた）の封地でした。村長さんや村の有力者のおじさん達は、大変教育熱心でした。学校の記念行事などがあると、次々と講堂の演台にあがり、熱弁をふるうのでした。「国の再建は。君達若者の双肩にかかっている。しっかり体を鍛えて勉強に励んでください。そして平和国家の未来を築いてください」

吉利村に引揚げて到着した日の翌日のことでした。挨拶回りで、夕方帰って来た父母は、私が近所の子供達と、一緒に走りまわって遊んでいるのを見ました。その夜、私は父の前に正座させられて、コンコンと説教されました。「百姓の子供達と同じことをして遊んではいけない。お前にはそんなヒマはない。うんと勉強して、上の学校へあがらなければならない。だから鹿児島弁も覚えてはいけない。いずれお前は東京へ行くのだから」と、小学一年生～五年生の勉強不足を一年で取り戻すために猛勉強開始。

住むことになった旧避病舎は、広い田圃たんぼの中にポツンと建っていて、電気も水道ありませんでした。中間期の算数の試験でいきなり80点の高得点。自信がつき頑張りに拍車がかかりました。小学六年生で奨学金がもらえるようになりました。もらった百円／月はそのまま母へ。

昭和二十一年（終戦の翌年）の食糧不足はヒドかったです。私達は苗を取った残りのカライモ（サツマイモ）を食べました。これは食べ物ではありません。「マズイ」を形にしたようなしろもの。イモ畠たんぼに生えて来た雑草ホトケミン（スベリヒユ）、次はイモのつる、カボチャの茎を食べました。筍はあらゆる竹の子。竹の子はご馳走でした。そんな時、田植前の田圃たんぼでつかまえたタニシは格別においしかったです。味をしめ、田植の終わった田圃たんぼに入ってタニシを探していたら、大きな雷声で怒鳴られました。大事な苗を植わった田圃たんぼで遊んでいると思われたのです。タニシ取りは二度とやりませんでした。この年、昭和二十一年はお米が大凶作で、米軍が救難物資を放出しました。まずい家畜用のトウモロコシ、次にコムギ、キューバ糖です。毎朝、毎昼、晩、ソウメンという日が続きました。幸い、昭和二十一年はカライモが大豊作でカライモ様様でした。小学三年生の弟（次男）が、自分で捕まえたモズクガニとザリガニを、自分で鉄かぶと製の鍋で茹でて食べているのを見ました。頼もしい男の子になりました。

中学二年生の冬の頃から、私はイジメられっ子になっていました。原因は言葉（私は鹿児島弁ができない）と、帰りの暗闇ひとだまと人魂が怖くて子供主役の村祭りの稽古けいこをサボっていたからでした。暴力は受けませんでした。精神的にギリギリまで追いつめられていました（シンデシマイタイ！）。二年生三月の春休みに突然、鹿児島市の長田中学校へ転校が決まりました。天の助けでした。父が郵便局の新築の官舎に入居できるようになったのです。有難い文明の利器の電気と水道があり、明るい電灯の下で踊りました。

次のハードルが待っていました。田舎の中学生は手作りの道具で、卓球と野球に熱中していました（私も）。鹿児島市立長田中学校の三年生の担任の先生は、父兄会で母親に指摘しました。「中村君は基礎ができていないです（奨学生のクセに！?）」。高校受験の猛勉強開始。中学一年からの教材の総復習。特に数学

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

と理科。英語はイソップ物語の対訳書を二度通読。昭和二十五年四月、競争率二倍のラ・サール高校に合格。奨学金は自動的に引き継がれました。五百円／月は月謝と同額。その頃、六歳の弟（三男）が紙芝居のおじさんから買った水アメをなめているのを見たことを思い出します。「非常時が終わったな」と思いました。

一年浪人の後、昭和二十九年四月、東京都立大学に入学のため上京しました。新天地へ出発。父の説教が実現し始めました。昭和二十九年の経済白書が「もはや戦後ではない」と発表。食糧難の後遺症でしょうか、サツマイモ、カボチャを少し敬遠します。

次の世代へ。悲しい戦争の歴史は繰り返してはいけません。戦争は勝っても負けても、敵・味方の沢山の若者が血を流し、大勢の家族を悲しませます。外交は争わずに解決する方法を見つけることが最大の目標です。憲法九条はそのためにあるのです。大事に永遠に守りましょう。

終戦の思い出

中山 敬一（根戸 在住） 1934年生

昭和20年8月15日の終戦を迎えた時は、国民学校5年生であった。天皇の玉音放送があるというので、近くの人達が3～40人、道端に座り（一部の人達は正座して）放送を待ち構えていた。私が住んでいた所は、北海道の下川町で、今日ではジャンプの町と言われたり、環境未来都市に選定されたりして知られた町になっているが、当時は片田舎で、下川村であった。従って、ラジオを有している家も稀で、薬屋さんを営んでいた、親切な御主人がラジオを道端に設置して、玉音放送を聞かせて下さったのである。5年生の私にとって、放送は難しいものであったが、戦争に負けたのだと言うことは確認できた。周囲の人の中には俯うつむいて涙なみだを拭ぬぐっている人もおられた。

まさかあの戦争が負けるなどとは思ったこともなかったので、驚きと共に、今後どうなるのだと思ったことが、微かすかな記憶として残っている。5年生とい

えども、将来は何になると問われれば、必ず「兵隊さんになる」というのが決まり文句であった。敵兵をやっつけて御国のために命を捧げるといようなことは当たり前のことだったのである。教育とは、ここまで人を順応させうる、大きな力を持つものなのだ実感させられている。

幸い、田舎だったので、敵機が飛来してくることもなく、都会の人達に比べると苦難は少なかったと思うが、それでも5年生以上になると農家のお手伝いに行ったり、道路の草取りなどをすることも多かった。農家は主人や有力な働き手が軍隊に召集されて、労力が不足していたので、子供の手も役に立っていたのだと思う。学校では手榴弾しゅうりゅうだんの投げ方や防空壕に身を隠す練習などとした記憶がある。先生方も厳しく、今で思えば暴力に相当するような事は日常茶飯であったように思う。私も隣席の同級生とお喋りをしていたところを、運悪く女の先生（当時の女学校を出たばかりの若い先生）に見つかり、2人で教壇に立たされ、びんたを張られたことを覚えている。勿論やさしい先生もおられた。優しかった先生とは今でも賀状を交換している。

また、当時の食糧事情の悪さも忘れることはできない。幸い、我が家は小規模な農業と旅館（とはいえ、薬売りの行商人や馬櫓ばそりで木材を山から運び出す季節労働者の旅館）を営んでいたもので、どうにか食い繋いでいけた。一般の人達は、食料の配給を受けていたが、十分な量ではなかった。我が家は、小規模な農業を営んでいたもので、配給は受けられなかった。馬鈴薯ばれいしょ（じゃが芋）が多く生産されていたので、御飯の中に馬鈴薯を入れた芋ご飯は上等な方で、中には澱粉でんぷんの絞り粕かすまで食べたでんぷんと聞いた記憶がある。澱粉でんぷんの絞り粕かすと言うのは、馬鈴薯から澱粉をとる時に生ずる残り粕であり、多くは豚の餌になっていた。このような食糧難の時代に育ったお陰で（？）あろうか、今は好き嫌いがなく、何を食べてもおいしくいただける。

中学生の時、両親はこのままでは子供に教育を受けさせられないと思ったのであろうか、商売替えをして、豆腐屋を始めた。両親は教育を受けていなかったせいか、子どもの教育に熱心であった。この豆腐屋が順調に成長し、町内だけでなく、他の町の店にも卸売りするようになっていった。そのお陰で私を始め、兄弟も教育を受けさせてもらえた次第である。今は亡き両親に心から感謝

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

している。感謝できる年頃になれたのであろうか。

戦後70年、紆余曲折はあったが、戦争の無い平和な歳月が流れた。長くも短くも感じられるが、この平和な歳月だけは続いてもらいたいと、切に願う次第である。最近、集団的自衛権だとか安保法制などと言う、耳障り、目障りな言葉に触れる機会が多くなっているが、後世のためにも戦争だけは絶対に避けてもらいたいと願い、愚稿を閉じさせていただく。

次世代に伝えたい戦中の体験、 戦後の苦労、戦争と平和について

人見 武（湖北台 在住）1933年生

私が小学2年生のころ太平洋戦争が始まり、6年生の夏に終戦を迎えた。京都で生まれ育った自分は、幸いにして爆撃にも、原爆の被害にも合わなかった。戦争の実態とその悲惨さを、書物やテレビからのみしか知ることが出来なかった自分を申し訳なく思っている。戦後70年、何とか日本は平和に暮らしてきた。しかし安倍内閣になってから、憲法改正、集団的自衛権の行使容認、沖縄米軍基地移転など、平和を脅かす動きが大いに気になる。最近の安倍首相の訪米でのオバマ大統領の歓待ぶりや、米国議会演説の反応からみて、米国の同盟国日本への期待感が窺^{うかが}える。日本が米国の占領統治の時代から独立を勝ち取ったとはいえ、米国の種々の要求に対して、戦後70年経っても未だに“NO”と言えない。米軍基地の7割を超える沖縄の声を無視して、やがては、自衛隊の海外派遣が戦禍に結び付く可能性を、国民が危惧^{きぐ}しているのが現状ではなかろうか。

小生の戦中、戦後の体験や感想及び平和への願いを書きたいと思う。戦火が激しくなった昭和20年の初め、京都も爆撃にさらされる危険が迫ったと言うので、学童たちを疎開させることになった。大阪を爆撃したB-29爆撃機が銀色の機体をキラキラ輝かせながら、京都上空で旋回して東方に向かう様子を庭先から眺^{そかい}めていた。小学児童の多くは、京都府北部の舞鶴市近郊に集団疎開し

だが、私は奈良県の親戚を頼って1人で縁故疎開することになった。付近の小学校（戦時中は国民学校と言った）に、慣れない草履ぞうりをはいて通学した。田舎でも戦時下の厳しい教育や訓練が行われ、子供ながら緊張感ただよが漂っていたのを思い出す。田んぼの畦道に空豆の苗を植えたり、硬い校庭くわに鋤を入れてサツマイモを栽培した。都会育ちには肉体労働がこたえたのか、病に倒れ実家に帰って静養していた。昭和20年8月15日、暑い夏の昼下がり、天皇陛下の重大放送をラジオで聞いて、敗戦を知った。その後、中学校に入学したが、ある日、GHQ（連合国総司令部）の教育部門の関係者2～3人が来校した時、いつも偉そうに教えていた教師が彼らにペコペコ頭を下げているのがおかしく、今でも印象に残っている。

私が初めて進駐軍を見たのは、ある雨の夜、米軍が和歌山県の海岸から上陸して、大型のトラックを運転して、京都市内の近所の交差点にやって来た時である。国内では見たこともない幌ほろをかぶせた8～10輪車の大型車両であった。見るからに頑丈な構造で、車輪も大きく太かった。夜間で運転手の顔が良く見えなかったが、こんな相手と戦争していたのかと実感した。また、テレビや新聞に出てくるルーズベルト米国大統領、チャーチル英国首相や蔣介石しょうかいせき中華民国総統の顔写真を見て、国民学校で鬼畜米英のスローガンのもと、描かされた似顔絵と特徴をよく捉とらえていたとはいえ、実像とかけ離れていたのに驚いた。その後、京都市内に米兵（GI）を見かけるようになり、大柄なGIが乗ったジープが市内を走り回るようになった。ふざけて霊柩車に乗って手を振るGIもいた。東山の八坂神社の石段をジープが駆けあがったと言う話も聞いた。米軍のキャンプ地は、市が大事に管理していた植物園を占拠して兵舎や住宅を建てた。当時の大工たちの話では、自分らが苦勞して建てた檜ひのき造りの木造住宅の柱や床の間に、GIはペンキをペタペタ塗ったとこぼしていた。

私の兄貴は学徒動員（但し、理工系の大学生は兵役免除だった）で徴用されて、静岡県あたりの海岸の米軍上陸に備えて従軍してしたが、終戦間もなく無事に実家に帰ってきた。その後学生の頃に、米軍キャンプにアルバイトに出かけていた。その時の話に興味をそそられた。キャンプ内にPXストアはいのうがあって、日用品が揃っていたという。彼ら兵士が使う背囊（方形の背負いかバン）

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

にはタバコからチューインガム、コカコーラなどがセットになって入っていて驚いたという。靴は日本兵が使う編み上げ靴やゲートル（帯状の長い布、スネに巻く）を使わないで、着脱が容易になっていると言う。殺虫剤も用意されていて、日本帝国軍人は寄生虫のシラミを飼っていたのかと^{やゆ}擲揄されたという。また、生命線であった石油については、日本では松の根からとった松根油まで使っていたところ、アメリカではわずか1州の産油だけで必要分が^{まかな}賄われたと聞かされて^{あぜん}啞然としたという。勝敗は最初から明らかであったようだ。

戦後の成長期の我々は栄養不足で、食料は配給制でコメは月に数日分、^{ひえ あわ}稗、粟等の他に大豆やトウモロコシから油を絞った^{しば}残り滓^{かす}を食べて飢えをしのいだ。後で聞かされたが、それらはアメリカの家畜に使う飼料であった。負けた国民は、文句は言えなかった。兄がキャンプから貰って来たコンデンスミルクや粉ミルクの味は今でも忘れがたく、彼らが常用しているのかと思うと、惨めな思いであった。

如何なる「戦争」にも正義はない。女性・子供を巻き込む「戦争」を正当化することは出来ない。最近になってテレビのドキュメンタリー番組で、極東裁判の内容やマッカーサー^{げんすい}元帥の議会での証言内容が明らかになった。原爆投下の人道上の犯罪性や天皇の戦犯について触れた判事がいたものの、結局、連合軍側の「勝ち組」の論理に押し切られた感じだ。今後、地域の紛争が拡大すれば、核兵器が使用される可能性がある。そうなれば、人類は全滅の危機に直面するだろう。如何に平和を維持できるか、唯一の核被爆国である日本国民の「平和への努力」が試される時が来ているのではないだろうか。

教育の誤りと戦争

平澤 角四朗（船戸 在住）1927年生

昭和19年、陸軍少年通信兵学校に入った。修学期間は約2年であった。電気の用語にインピーダンス、コンデンサー、バッテリー、スーパーヘテロダイソンなど、カタカナ語が沢山出てきた。その時の通信区隊長が、これらの語を理

解するために英語、アルファベットを覚えるように言われた。あの当時、英語は敵性語で習うことすら禁じられていたので、事もあろうに大日本帝国陸軍の学校で習うとは驚いた。あとで考えると、この隊長は色々な情報を知っていて、敗戦必至と予測し、英語の必要な時が近いと思っていたのかもしれない。

翌年、敗戦となり8月の終わり頃に学校は解散、復員となった。帰る間際に、道で米兵とあったら“ノウ、アイドントノウ”と言って逃げろと教えてもらった。私は“アイドントノウ”の意味は知らなかったが、ともかく覚えた。また、敗戦直後は、米兵のために地名、建物名を示すローマ字の標識が沢山立った。その中に、**The** がついた標識が多かった。もちろん、このテー、エッチ、イーの意味もわからなかった。

昭和21年3月のある日、新潟市内の野球場で野球の試合を見た。すると、若い米兵がやってきて隣に座り、投手を指して「とうしゅ（投手）わかりますか」と日本語で話しかけてきた。彼の言う事はわかったが、アイドントノウも言えず黙っていた。今にして思えば、彼はいくらか日本語を知っており、彼は、話したかったはずだから、日本語で返事をして、会話をすれば楽しかっただろうにと残念に思った。

戦後は英語学習が非常に盛んになった。自分も勉強した。辞書を引きながら本を読んでも、本当に理解したのか自信が無かった。そこで、TV、ラジオの英語講座で「基礎英語」の勉強を始めた。現在も「ラジオ英会話」と「ビジネス英会話」のテキストを購入して続けている。おかげで、ロンドンでは、B&B（簡易宿泊施設）ではシャワーの具合が悪い、寒いので毛布が欲しいなども対応してもらえた。その後も北アイルランド、米国などで、下手な英語で一人だけの周遊をしたが、いろいろに助けられた。

日本は一等国、アジア諸国は3等国と見下し、米英は鬼畜と教えられ、多くの国民はそれに踊らされた。「生きて虜囚の辱めを受けず」の戦陣訓等の教えは、軍人、民間人の心を縛り、多くの命を奪った。どれだけの人が悲惨で、無駄な死を遂げたことか。また当時の日本人は、日本は神の国であり、戦争は絶対勝つと教えられた。ここに至ったのは教育の誤りが先か、戦争が教育を誤らせたのかは、断定しかねるが、先の戦争から学ぶなら、嘘を言わず、戦争を

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

推し進めるような教育はすべきではないと肝に銘じるべきだ。

アメリカ軍の東京空襲の中を恐怖の逃避行

藤木 顕斉（並木 在住） 1939生年

昭和20年、6歳の春の事でした。今まで聞いたことがないヴウンという重低音の飛行機の爆音が、はるか空高くから聞こえてきました。見上げてみれば見たことがない大型の飛行機が、悠然と西の空から東の空に抜けていこうとしていました。大人たちの会話でB29爆撃機と知りました。アメリカ軍の本土襲撃も西日本から中部地方に移り、いよいよ東京圏がターゲットになってきたのです。東京圏の防衛能力の確認にB29を飛ばしてきた様子だと大人たちは話していました。太平洋戦争末期の日米の武器の技術力は、戦争初期のゼロ戦の圧倒的な能力の高さで、制空権を支配していた時代は既に遠くに去り、米国との技術能力の差はいかんともしがたいレベルになっておりました。B29が下見に来たことは日本軍も認識して、高射砲で迎撃したり、戦闘機を迎撃させてはいましたが、飛行能力の彼我（相手と自分）の差は決定的なものでした。空高く1万メートル超を飛んでいるB29に高射砲は届かず、戦闘機も届きませんでした。アメリカ軍はそれを承知していたのでしょう、その結果B29は些事（ささいなこと）にお構いなく悠然と下見して帰還していきました。

そのあと東京は地獄を見ることになりました。アメリカは日本の家屋の特徴にあった爆弾、すなわち焼夷弾（ガソリンを内蔵した木造家屋を燃やすためのもの）を開発し、それを東京のというより日本の下町、山の手、軍事工場をとわず、焼夷弾を雨あられと落としまくったのです。武器を持っているいないは関係ありません。軍人も平民も関係ありません。ただ東京を焼き尽くすことだけが目的で、日本軍の戦意喪失を狙って攻撃してきたのです。その結果武器を持たない一般人が20万人もなくなっているのです。

私は当時東京の目黒区洗足に住んでおりました。東京の静かな山の手住宅街です。そこで父母と工場に学徒動員していた長兄と長姉、それに4歳と2歳

の妹と弟の7人で暮らしておりました。周辺には工場もなく、勿論軍関係の工場もありませんでした。しかしアメリカ軍は無防御の民間人への攻撃は容赦ありませんでした。ヒューンという独特の音を立て、焼夷弾が次から次に降ってきました。父と長兄は家屋の消火に当たり、父の命令で前からの手筈通り母と姉は妹と弟をおんぶし、私の手をつなぎ品川の叔父の家をめざし避難いたしました。いたるところが火の海となっておりました。それでも焼夷弾は投下され続けていました。倒れている人も何人も見かけました。どんな状況かといえば、神戸大震災の時の発生した火災がそっくりでした。町中が燃え上がり、逃げる道はどこも炎が逆巻いていました。逃げる途中見知らぬおじさんに呼び止められました。気が付いてみれば靴が片一方脱げてなくなっていました。当人は火と焼夷弾が怖く全く気が付かずにいたのです。おじさんに指摘され初めて気が付いたのです。そしてご息子が履いていた靴をいただきました。あの日の火の海の中での、見知らぬおじさんの気遣いに感謝の言葉もありませんでした。その中で、我々親子は必死で目黒のまちを逃げまわりました。どこの道も全く同じでした。そして奇跡的という他ありませんが、傷一つ負わず、無事に叔父の家に着きました。叔父の家もこれまた奇跡的に戦火を逃れて無事でした。あとから考えると、あの時無事にいられたのは、何かの力で生かされているのではないかと感じたことが、しばしばありました。翌日、父のサイドカーで目黒品川^{かいわい}境界を見に連れて行ってくれました。ほとんどの家はありませんでした。そのかわり燃えカスがまだくすぶり続き、まだまだ消失した家屋の煙に町は覆われ、霞がかかっているようでした。太陽は赤い色をしていました。何もなくなつたため見通しは煙っていてもよく、遠くの富士山が見えました。先ほども述べましたが、神戸大震災の焼け跡があの日^{さんじょう}の惨状とそっくりでした。

東京大空襲にみまわれた直後に家族は、東京で仕事があった父と、学徒動員していた兄と姉を残し、故郷の京都に3年間疎開しました。京都は文化財保護のアメリカ軍の方針に守られ、本当に静かな生活を送らせてもらい、私の戦争物語は終わりました。

そして戦争とはそんなものだという人たちがいますが、無防備な一般人をめがけて攻撃することはいかかなものなのでしょうか？今でも戦争になると、一般市

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

民が多数犠牲になっておりますがルール違反と思われ、許されない行動と思います。一方すでに負け戦になっている日本をさらに深手を負わせ、その後40万人もの多大な人命をも失い、多くの国家財産をはじめ多くの民間財産も失うことに導いた我が国の指導者も、厳しくその責任を問われるべきだったと思いますが、中途半端の反省で終わり、その責任も偏った追及で処理されたことは、痛恨の極みと言えます。終戦後の太平洋戦争の反省の仕方の中途半端さが、その後の国際社会の中での日本の生き方に影を落としていると思われま

徴兵

古谷 正（青山台 在住）1916年生

1回目の徴兵を受け、北支（中国北部）で2年目を迎えた。昭和12年（1937年）の春である。大地には麦が伸び、タンポポが咲き、楊柳が弱々と風に揺れ、その影が川面に写る。戦陣生活も長くなると無性に帰りたくなる。帰心矢のごとし。しばしの駐屯の間に下痢がひどくなり、コレラと言われ野戦病院に入った。病院は山西省新郷域外の駅近くにあった。敵襲があると、病人でも歩ける者は銃を持って集まれと言われる。それでも前線よりは良い。療養も終わり原隊に帰る。これからまた大変だナーとしみじみ思う。

2回目の徴兵はニューギニアであった。マラリアや食糧不足による栄養失調と熱帯潰瘍（上皮欠損）でそこちちが化膿した。夜になると大きな鼠が来て傷口を舐める。痛いので眠れない。足の指の間が膿んで靴が履けない。後方から敵が迫ってきても部隊の転進について行けず、「最期の決は、44師団司令部の命によるべし」と体よく置いて行かれた。ところが、先に転進した部隊が海陸両面から攻撃され、1ヶ月とたたぬうちに敗退して戻ってきた。疲れ果てたその姿は見るに無残だった。それでも帰って来られた者は幸いである。ほとんどは帰らなかったのである。いつしか陸上での戦闘は止み、空爆のみとなる。活路は断たれジャングルに落ち伸びて、現地自活となった。第一次大戦でドイツ軍がこもったらしい所を転々としているうちに終戦となる。捕虜収容所に入れら

れたが、第2便の復員で広島にたどり着いた。昭和20年12月であった。

復員後も栄養失調は回復しない。ある時、高熱が続いてマラリアの治療をしてもらった。実は診^みたて違いで危うく手遅れとなる所だった。先生が替^かわったおかげで、間一発命拾^{かんいっぱつ}いをした。胸部疾患^{きょうぶしつかん}の手術を受けた。今夜が峠と言われた夜は長かった。運命と言うものがあるのだなあと思う日々であった。

家永三郎「戦争責任」(P275、岩波書店、1985年発行)に「帝国臣民^{ていこくしんみん}(天皇の臣民)である男子は、・・・省略・・・徴兵に復する義務を負い、一定の年齢に達すると徴兵検査を受け、体格の優劣により現役に適すると認められた者の内から所要人数が軍隊に徴^{ちようしゅう}収された。戦争の進行に伴い、徴兵は低年齢に及び、また徴収範囲が国民兵役に服したものに拡大されて、体格劣悪^{れつあく}の者まで徴収される状況となっていた」とある。

戦前、人々は臣民と呼ばれ国家に命を捧げる教育がされた。ニューギニアに行った約20万人の中で、帰還できたのは1割程度、補給路を断たれ^{りょうまつ}量秣(食糧)を失い、ほとんどが戦死というより病死^{がし}や俄死だった。帰還した兵隊は「敗残兵」と呼ばれ、戦場での悪夢から解放されることはなかったという。

次世代に伝えたい戦中体験

～昭和19年 中学2年生の日記 から～

松本 庸夫(緑 在住) 1930年生

昭和18年4月愛媛県立松山中学校(現在の松山東高等学校)に入学した。この年の麦秋、長雨が続き麦の取り入れがおくれ、芽を出し始めるというので手不足の農家に手伝いに行った。8月11日から20日までの短い夏休みのあと、港山(地名)^{ていこ}艇庫での海洋合宿訓練の日程なかばから降り始めた雨は、重信川流域に大水害をもたらし、2学期になるか、ならないうちから復旧作業に出動した。この水害復旧作業は所を変え、断続的に翌年まで続いた。稲刈り時期の農作業手伝いにも出かけた。

2年生の昭和19年になると、戦局のきびしさは地方の町の身边にも押し寄

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

せてきた。ざら紙に書かれた同年4月から8月までの日記から、その間の授業外行動を拾い出してみると次のようになる。

①水害復旧作業、②麦の収穫手伝い、③報国農場での農作業、④吉田浜(現在の松山空港、当時は海軍の飛行場)での掩体壕構築作業(えんたいごう:飛行機を隠し爆風を避ける施設。柏市内にも残っていると聞く。作業はモッコ担ぎで土を運ぶことが主)、⑤見奈良(地名)で滑空訓練所建設作業。

そして8月12日(土)の1学期終業式、8月21日(月)の2学期始業式となり、8月24日から4・5年生は新居浜の軍需工場へ通年動員(毎日動員作業)、3年生は3週のうち2週吉田浜へ、我々の2年生は3週のうち1週吉田浜の掩体壕構築作業へという動員態勢に移った。このような中で、5月22日の記述は印象深い。少し長くなるが日記の全文を引用する(文字遣いは原文のまま)。

【五月二十二日 月曜日 晴/今日は昭和十四年今月今日、全国青少年学徒の代表が宮城前広場で賢くも天皇陛下のえっけんを拝受した、その記念式を行った。講堂が海兵の試験場になっているので武道場で行った。青少年学徒に給はりたる勅語ちよくご、軍人に給はりたる勅諭ちよくゆの奉読があり、校長の話があつて式は終わった。今日は我々には忘れる事の出来ない日である。その後で十六日にやるべきだった開校記念式を行った。今年五十七周年である。これは松中が伊豫尋常じんじょう中学校と言ふのになつてからで、明教館(注:藩校時代の学校)で勉強して居った時まで逆上ると百数十年になるのださうだ。その後で開校記念式にご出席下さった先輩である後援会副会長のお話があつた。そのだいたいの内容は「軍人ばかりが国に尽くすのではなく音楽等でも必要なのだ。武力のあとの大東亜建設する為には、今まで文化の高いヨーロッパ人に治められていたのだから原住民に日本のよい所を本当に知らさねばならぬ。上級学校へ行く時は先生や父母の意見、それに自分の希望も入れて学校を定めよ。」よいお話であつた。】

この日、2つの行事が行われたが、戦時一色の中で後援会副会長のお話は私に余程感銘を与えたと思われ、日記最後の「よいお話であつた」がこれを示し

ている。当時は進学希望調査では海軍兵学校や陸軍士官学校が奨励され、本心を言いにくい状況で大学希望の自分もそれを言わなかった。「県中」とも呼ばれ、下宿して通学する生徒もいた愛媛県トップ校であったから、後援会副会長のお話も受け入れられたのであろう。

2年生修了の昭和20年3月半ばからは通年動員となり、新居浜市内に在った蚕棚のような寮から海岸の方に在る軍需工場に通った。初めの訓練期間中は老職工長からやすりのかけ方、たがねとハンマーで鉄片を研る（削る）ことなどを習った。たがねの先の方を見ながら打つハンマーが、たがねの頭をそれでそれを持つ手を撃つと、しばらくして血が出る。またそれと同じ所を撃つと一瞬血は失せて白い身が出るが、すぐ前よりももっと多くの血が出る。その後配置されたのが36尺旋盤（長さ10.8 mの旋盤）で、小柄な身にはハンドルを回すのさえ容易ではなかった。大きな魚雷らしいものの先端部分を削る手伝いをした。戦局も最後の段階に至り沖繩戦の「斬込み隊の歌」を歌いながら夕日を受けて寮に帰る時、そのメロディーがかもし出す淋しい気持ちは今も鮮明に記憶している。

7月26日には大部分の生徒宅が在る松山市が空襲を受け、たたき起こされて外に出、西の空が真っ赤になっているのを見た。先生は「おまえ達の家が燃えているのだぞ」と。

戦後は焼け残った近くの学校の武道場を間仕切りした所や、焼け跡のバラック校舎ではあったが、やっと松山中学生らしい勉強ができたと思う。軍指向の制約も感ずることなく、不自由な食糧事情の中でも自縛から解放され、希望の進学先を選べるようになった。

戦争をしてはならない

三谷 和夫（天王台 在住）1928年生

●私の戦中・戦後

私は軍国少年として教育された。昭和18年6月中学3年生の私たちは、学

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

校から出て毎日工場に通う。もはや教室での勉強は許されなかった。対戦車砲の製造のためフライス盤を使う。正月は夜勤のため真夜中も働いた。昭和20年2月広島高師入学の筆記試験があったが、病気の私は広島に行けず不合格。もし合格して広島に行っていたら、8月に原爆が落ち私は死んでいたかも。昼間、敵戦闘機の攻撃にあい、私に向かって来る敵の機銃掃射から逃げて農家の周りをぐるっと廻った。四日市が焼夷弾攻撃で街全体丸焼けになり、知人の家も焼ける。焼野原を友人と見学に行く。黒焦げの死体がごろごろ。飛び越えて進む。水槽に逃げこもうと争った形のまま丸焼けの人も。卒業後も動員継続。同じ工場で働き8月15日敗戦。

9月に晴耕雨読の授業を始めるから出校せよと連絡あり。荷物を入れた^{ごうり}行李を背負い、大混雑の列車で浜松へ。旧制専門学校の寮に入る。街も学校も焼野原、受験のとき見た白バラの垣根の学園は跡形もなし。元高射砲学校の兵舎跡で学ぶ。寮の食事は米不足のためおかゆの大根めし、すき透るようなしゃぶしゃぶの感じ。腹がすくのでふかしたさつまいもを皿に盛る店へ通ったりした。寮仲間十余人が裏山へ行き、さつまいもを洗面器でゆで、それと争って食べたこともある。日曜には朝から歩いて天龍川を渡り、農家に着くと昼。お願いしてさつまいもをふかしてもらい昼めしとした。また、さつまいもをゆずってもらい、リュックにつめて帰ると夕方になる。そんな中でも寮歌に歌う「泣くな嘆くなグチ言うなホイ……」の心境。

●まちの戦死者

湖北、正泉寺の染谷^{かつ}克家の墓地に染谷^{たかし}堯陸軍中尉の墓碑がある。この軍人については『我孫子市史研究』16号に、市民多数と私の書いたくわしい報告書があり、かんたんに述べる。堯氏は都部新田の農家の長男として出生。我孫子第一小学校高等科を卒業後、県立印旛実業学校に入学、昭和10年同校卒業式で卒業生総代として答辞を読む。同12年徴兵検査で甲種合格。この年の7月に日華事変が勃発、戦争が始まる。翌年1月、佐倉連隊へ入隊、これよりずっと軍隊生活が続く。日華事変は拡大の一途をたどり、日本は長い戦争へ突き進んでいった。氏は満州へ行くが、選ばれて陸軍予備士官学校に入学、仙台にお

もむく。14年3月同校卒業、佐倉に帰隊した。このころ佐倉では歩兵第212連隊が編成され氏もこの中に加えられ、5月には北支（現中国の北部）の山東省に到着。警備と戦闘の任につく。敵はゲリラ戦を行っており、いつ何があるかわからない。11月28日討伐に出て畑に陣取り、氏は双眼鏡で視察中に敵弾が命中、即死。現地に着いて半年、少尉の服が家から届いたのに着ることもなく、余りにもあっけない戦死であった。満22歳。いく母君は早く夫（堯氏の父君）を失い、長男の戦死、そのあと次男の病死、そして再婚の夫も失った。堯氏に下賜された金鵝勲章きんしから作った指輪を手から離さなかったという。堯氏は染谷家にとって大事な跡取りであったが、身体強健、学力優秀で我孫子市長になったかも知れずといわれた逸材で、地域にとってもまことに惜しい人材であった。

正泉寺の染谷家墓地の隣に松下家墓地がある。松下敏郎氏の二子息、長男松下忠衛伍長と次男松下甲子夫上等兵は何れも戦没。二兄弟の慰霊碑が境内に建っている。その右側に「戦没兄弟の母 松下さい之碑」が並んで建っており、「昭和三十七年三月六日松下敏郎建立」と彫られている。農の跡をつぐべき2人までが戦死したため、農家の切盛りにその母は大変な苦勞をせざるを得ず、65歳で病没したのを夫敏郎氏が三回忌にあたり建立したものである。私は先日、正泉寺でこれらの碑の前に深く頭を垂れ、涙のにじむのを禁じ得なかった。

我孫子市では、このように惜しむべき人たち四百人余が大戦で亡くなったのである。

●戦争に近づいてはいけない

戦争は結局人の殺し合いであり、人が人を殺してよいはずがない。物事を武力で解決すべき時代ではない。日本国憲法は平和のために理想的な憲法であり、ノーベル賞候補にもなったのである。この理想を世界に実現すべく日本が先頭に立つべきでないか。国連に国際警察隊創設を検討すべきかとも思う。戦争にはいくつか前段階があるが、先の大戦では大臣や司令長官級の人が戦争しないと考えても、戦争に行ってしまったのである。気づいたらもう遅いとも言える。憲法違反と専門家が言う法案がすでに成立してしまった。しかし私たちは希望

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

を捨ててはいけない。戦争に近づくことを最大限に力を尽くして止めねばならない。子孫の未来のためにも再び戦争に行きつくことのないように、これから粘り強い努力が必要である。

我孫子の戦中・戦後

宮田 忠義（白山 在住） 1932年生

戦中

日本が初めて空襲を受けたのは、昭和17年4月18日、空母から発進した航空機による空襲です。この空襲は渋谷にいた時なので記憶にあります。

昭和18年6月に渋谷から我孫子へ引っ越してきました。転校したのは我孫子中央国民学校で、5年生に入りました。まず驚いたのは先生が児童にビンタをくれていた事です。渋谷に居る時には先生が児童に体罰をいれた事は一度もなかったが、我孫子へ来てからは、ビンタはあたりまえのようになりました。次に学校の便所から糞尿をくんで桶に入れて、現在の栄（ガサラ塚）にある学校の畠まで運んだ事です。これは2人1組で行いました。

昭和19年7月のサイパン島の陥落で、B29の空襲の機数も多くなり我孫子の上空もよく通過していった。富士山を目標に侵入して来て鹿島灘に抜けるルートが多かった。

その年の終わりだったか20年の始めだったか、隣組の要請で勤労奉仕として母親の代わりに利根川の仮設鉄橋の敷設工事の作業に出た時に、戦闘機による機銃掃射を受けた事もありました。今の子の神様の入り口・金八稲荷の前あたりから、子の神様への道の右側を開墾^{かいこん}して食料の種子をまいた事もありました。

20年の4月から高等科に進みましたので4月の後半頃と思います。現在の東我孫子へ行く道（坂東バスの車庫の前あたり）は、当時、小松林になっており、松の木の根っこから油を作る作業を海軍の軍人と一緒に毎日行っていました。松の根っこがトラックで運び込まれると、それを下してノコギリと薪割り

とナタで一定の大きさに揃えて缶内に並べ、乾溜^{かんりゅう}させて油を作る作業でした。

話は前後しますが、20年の初め頃には我孫子の町の中に戦車が暫くの間いた事がありました。台数は不明ですが20台以上はいたと思います。又、現在の第四小学校は当時、日立精機の青年学校になっていましたが、この学校に陸軍の軍隊が配置されていました。2ヶ月か3ヶ月位はいたと思います。3月10日の東京下町の大空襲の話はよく報道されますが、その2日後あたりから大八車やリヤカーで東京から避難して来る人達が我孫子を通りました。我孫子の6年生は呼塚の柏と我孫子の中間位の所で避難してくる人の車の後押しをして、利根川の橋の所まで手助けをした事がありました。家の周囲では将校が住んでいたので、朝方、連隊から当番兵が馬をつれて迎えにきていた風景が他所と違っていました。現在の寿1～3の路地に防空監視所があったと思います。

敗戦後

20年に高等科へ進学したが、8月15日の敗戦でまた10月から6年生と一緒に勉強して21年4月旧制中学へ入りました。昭和21年4月に通学を始めて見たものは、既に松戸西口には闇市が出来ていました。通勤・通学で乗った列車の中で朝利用した取手発松戸行は、晴れの日は無蓋車・雨の日是有蓋車^{むがい}の貨車を使用していました。通学は命がけです。朝はなんとか乗車ができるのですが、帰りになると松戸からの乗車となり、既に上野から出るときには満員になっているので、途中の駅から乗る時には客車の屋根・側面・連結部・蒸気機関車の炭車の上または前面に乗ることもありました。柏で連結部に乗っていた生徒が発車のゆれで落ちて命を失ったこともありました。松戸は東北線の赤羽と同じように闇米を摘発する駅でしたので、摘発の時には、馬橋と松戸の間で車外へ米を袋ごと投げている光景をよく見ました。

以上、思い出して書きました。

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

戦争体験から平和の尊さを痛感

村井 好一（市内 在住）80歳代

昭和16年（1941年）12月8日我が国が太平洋戦争に突入した驚くべき大ニュースは、当時小学校4年生であった子供にも事の重大性を身にひしひしと感じさせられ、明日にでも米軍機が大挙して我が本土を爆撃するのではないかという恐怖心に駆られた。

この日を境にかねてから戦時色の強い日本は軍事一色となり生活が一変した。小学校でも体育が毎日必修科目となり、戦争激化に伴い学校での勉強は農作業の手伝い・開墾・土木工事などに傾斜していった。

同時に経済統制も一層厳しくなり、物品の購入は各家庭に配布された切符が無ければたとえお金があっても手に入らなかった。最も厳しかったのは日々の食材を確保することで、育ち盛りの我ら兄弟姉妹5人を抱え母親は連日大変な苦勞を強いられていた。父親は60歳過ぎの老人で定職がなく、収入と食糧の調達で両親のいざごは絶えなかった。

それでも幸い地方に住んでいたので日曜日は郊外の野山で存分に蕨・フキノなどの山菜採りに専念できた。当時極度の食糧不足を補うためにこれらの山菜は貴重な食料で、採った山菜は茹でて乾燥させ非常食として備蓄した。

昭和18年（1943年）以降、戦局は急速に悪化して敗色濃厚となり当時12～13歳の少年であった我々でも米軍が本土に上陸した場合は、青竹で作った竹槍を武器として米軍に突撃を敢行する運命を感じていたが、死に対する恐怖心は全くなかった。

翌19年頃から米軍機の空爆が頻繁となり、東京・大阪・名古屋などの大都市は勿論、軍関連都市をはじめ地方都市まで爆撃され徹底的に破壊されていった。私が住んでいた岩手県でも沿岸部の釜石は製鉄所が稼働していたので米艦隊の艦砲射撃を受け大きな被害を出した。内陸の盛岡市もある日突然日本近海の米航空母艦から飛び立った艦載機10数機が襲来、日本軍の反撃を全く受けることもなく上空を旋回しながら、機銃掃射を浴びせる恐ろしい光景と爆音は今でも鮮明に記憶している。

昭和20年8月15日、天皇陛下が重大放送をされるとの予告で古ぼけたラジオに聴き入ったが、音声が悪く内容を良く理解できなかった。その夜、父親が「戦争は終わった。電燈を覆っている黒い布を外してよい」と言ったのを覚えている。しかし戦争が終わっても焼土と化した街の復興、外地から兵隊さんの復員や一般市民の引き揚げなどで大混乱し、食料不足をはじめ衣服・住宅難は容易に解消されず数年以上続いた。

今年は終戦から70年の節目、日本は戦後の復興その後の高度成長期を経て今日の繁栄を築いた。戦争を体験した生存旧軍人は80代後半以上の高齢となり、想像を絶する悲惨なむごい戦争体験を語ることも無く既に多くの方々は旅立たれたが、生前、非人道的な真実はとても書き残せなかったに違いない。

幸い戦後70年平和が続いているが、先の大戦で戦死された310万人の貴い犠牲があることを決して忘れてはならない。私の次兄・義兄も戦死したが白木の箱の中には1枚の紙切れのみで遺骨は無かった。

我が国は戦後奇跡の繁栄を遂げ街中にあらゆる商品が満ち溢れ、お金さえあれば何時でも何処でも好きな物が手に入る今日。飽食こんいちの時代と言われ余った食べ物は惜しげもなく棄てられているが、目を世界に転じれば地球上では毎日1万人以上の人々が飢えに苦しみ餓死している現状を直視すべきである。

戦争と平和の2つの時代を経験した戦前生まれの年代には「平和の尊さ」に心から感謝しつつ余生を送っているが、近年戦争経験のない一部政治家による政治の右傾化を憂慮し再び戦争への道を歩まないよう切に願っている。

八月の空

村上 智雅子（若松 在住）1941年生

窓から見上げると、夏雲が点在する青空も手賀沼遊歩道の樹々も色鮮やかな午後である。今日は平成27年8月15日。熱中症がニュースとなる猛暑の今夏も、立秋を過ぎてから涼しくなった。沼を渡る風が、樹々を揺らしている。

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

遙か70年前に想いを馳せると、4歳の私^はがいる。住んでいたのは、埼玉県入間郡飯能町（現・飯能市）。天覧山のふもと、名栗川が流れる田舎町である。父が病弱なため母が家業の燃料問屋から洋裁学校に切り換え、お弟子さんと子供4人を抱え励んでいた。母の弟2人は、ラバウルと厚木の海軍航空隊に赴任していた。

終戦の前年昭和19年には、戦局の悪化とともに全国の織物工場は軍需工場に変えられ、母の営んでいた洋裁学校も軍服工場に切り換えられた。羽二重（絹）の落下傘や軍服の縫製^{ほうせい}が主な仕事であった。ふあふあと軽い布地をシンガーマシンで大きく丸く縫っていた。軍服に名札の白布を付ける時、母は戦地に赴いた弟たちの無事を祈ったそうである。

まだ幼かった私に戦争の記憶は薄く、空襲警報の度に庭の防空壕に逃げ込んだこと位しか覚えていない。ただ、警報が日に日に多く鳴るようになった昭和20年のふたつの出来事だけは、かなり鮮明に覚えている。

1. 上海からの叔母家族の帰還

ある晩のこと。真夜中に「ドンドン」と雨戸を叩く音がする。父と母が起きて戸を開けると、上海にいるはずの母の妹の家族4人がそこにいた。後で従姉妹に聞くと「昭和20年3月24日」であったという。すらりとこの日にちをいえたのは、余程の思いがあったのであろう。

叔父は当時海軍司令部の文官で、家族と共に上海に赴任していた。苦勞して外語大でロシア語・蒙古語を学んだ実直な役人であり、家庭人であった。上海での生活はそれなり落ち着いた日々であったが、急転してこの命からがらの帰国。今思うと理性的考え方が多かった海軍では、はや終戦の半年前から戦局の衰えと上海の街の不穏な状勢を擦知して、一部の家族を帰国させたようである。それも極秘に即座に。子供達には、「遠足に行くので準備しなさい」と伝えられ、何がしかの物をリュックに詰めての出発であった。岸壁には、珍しく海軍の詰襟の軍服を着た叔父が静かに敬礼しての別れであったという。楽しいはずの遠足は厳戒の逃避行にかわり、敵機やレーダーをかいくぐり1週間ほどしてやっと日本に着く。最初の福岡の港はいっぱいで上陸できず、瀬戸内海の名もない

港に上陸。それから乗れる電車を乗り継ぎ命からがらの帰郷であった。

2. 空から降ってきたビラ

それ程の空襲がなかった飯能にも、初夏には川に面した軍需工場が空襲を受けた。その時の火の粉が舞う様子を覚えている。小規模であったが、軍服工場も危ないということで姉2人は群馬に疎開した。私と下の従姉妹は一緒に社会館といわれた今の保育園のような所に通っていた。

或る日の帰り道。空襲警報が鳴り、突然B29が空に現われ、低く飛んで来た。家まで100メートル程ある。路上にはもう誰もいない。遠くに家のカタチの垣根が見える。もう少しだ。従姉妹が突然泣き出した。私は咄嗟に1歳下の彼女を背負って走った。もうダメかもしれないと思ったその時、ピンク色の紙のようなものがひらひら落ちてきた。それでも恐怖でどこをどう走ったかわからない。無事に防空壕に着いた時は、力が抜けてころびそうになった。

警報が解除され、外に出た父から「戦争は終わりました」というビラであったことを聞いた。このことが8月14日であったか15日であったか覚えていない。玉音放送は聞いた記憶がない。8月15日の空がどのような空であったかも覚えていない。

この一文を8月15日に書いた私に、友人が、坂上弘先生（我孫子在住の小説家。19歳の時芥川賞候補となる）が日経新聞に終戦のことを書いておられると教えてくれた。奇しくも、先生は飯能の隣の高麗村（現・日高市）に疎開しておられたという。

「八月について筆をとるとき眼の前にでてくるのは、終戦の日の高く晴れた夏空だ。玉音放送はよくきこえなかったが、青空が青空そのものになったと、十歳の心は思った。」（平成27年8月9日 日本経済新聞朝刊：坂上弘氏「向学の夏」より）

次世代に伝えたい戦中・戦後の体験

森田 好子（高野山新田 在住） 1931年生

私の戦争体験は、恐ろしかった空襲と、学生時代に学徒動員として働いた事、その他思い出し綴ってみた。子供の頃、東京都中野区に住んでいた。

◆日中に起きた東京大空襲は、夜になっても敵機の落した油脂焼夷弾で、中央線高円寺駅方面は、真っ赤な炎が何kmも横にメラメラと高く高く踊り狂い、燃え広がっていた。油脂性の大火災なので、なかなか鎮火しない。その時の炎景を見て、子供の私は、恐怖心よりも不思議な気持ちで見ている。今でもはっきりと目に焼き付いている。友人宅も燃えてしまったと聞いた。

◆7人姉妹と両親の9人家族。庭に横穴式の大きな防空壕を掘り、ブリキ板の蓋も作った。夜、空襲警報が鳴り、防空壕に入る暇なく敵機の音。そして、「ヒューウ」と不気味な音。父が、「伏せ！」と叫んだ。夢中で耳と目を指でふさぎ地面に伏した。「ドッスン」と重い響きで物が落ちた音。それでもシーンとした空気で何も起きなかった。翌日、父の呼ぶ声で家族みんな外に出た。昨夜、私達が伏せた庭から5m位離れた生垣を壊し、長さ50cm以上の爆弾が転がっていた。「油脂焼夷弾」と聞き、びっくりした。高円寺駅方面を焼き尽くした爆弾だ。幸いにも「中野区大和町あたりに落下した爆弾は、全部不発弾だった」と聞いた。これで命拾いをした。そして私は今、生かされている。

◆戦中、学徒動員として三鷹の軍需工場で無線機のハンダ付けの仕事をした。現在の中学1～2年生の年齢である。焼き^{ごて}鋸でハンダを溶かし、細かい電線を機械に付けるのだ。機械の検査は、ハンダ付けした線がついていれば合格。中には引っぱると「スポッ」と取れてしまう機械もあった。私は子供心に、「これでは戦争に負ける」と思った。

◆戦争の終わる頃、空襲警報は毎日のように何回も鳴り敵機が飛んで来た。初

めて窓を開け、隠れながら外を見た。低空飛行で、パンパンパン…途絶える事なく民家に向け機銃弾を撃ち込んで飛び回っていた。恐ろしく大きな飛行機だった。

或る日、敵機から、短冊のような形の薄い金属片が、キラキラ太陽に照らされ光りながら沢山空から降ってきた。美しい光景だった。しかし、日本の電波障害の為だと聞かされた。

◆戦前の我が家の正月。7人の女の子は着物を着せてもらい、2つのお膳を横並びにくっつけ、家族で囲み、お年玉を貰いお屠蘇とそで祝った。そして新しい下駄を履き、姉妹で羽根突きをして遊んだ。遠い懐かしい思い出である。

戦中戦後は衣食が不足し、食べ盛りの子沢山の我が家では両親が苦勞した。姉の友人の農家や、その周辺の農家を回り、子供や両親の着物を持って「食べ物いわゆるを売ってください」と頼んで回った。所謂、物々交換である。カボチャ、芋と交換した。米などは売ってくれなかった。母は腰を低く頭を下げた。必死だった。譲り受けた物をリュックに入れ担ぐ。10kg以上あった。「好子は力持ちだから助かる」と母は褒めてくれた。

学校に持参の弁当も、米の中に大根を刻み入れ、横にするとこぼれる「おかゆ」を大事に下げて通学した。そうした最中、友人の中に両親が大学寮の賄の仕事をしていて、いつも白米弁当だった。或る日その家に遊びに行き、白飯をご馳走になる。その時「おいしい！」を実感。今でも食事はご飯党で、これは過去の体験からきている？と思う。

◆髪の毛に白い小さな粒がこびり付きなかなか取れない。シラミの卵だ。新聞紙を広げ髪漉かみすきで梳かす。シラミがポトポト落ちてきた。中には血を吸い赤く太ったシラミもいた。1回だけの体験だが、私も近所の人達と並び長い筒状の中に白い粉の薬品（DDT）が入った噴霧器を持った男から、髪や服の中に白い粉を散布された。みんな顔や服など白い粉だらけになっていた。今考えると、「すごい事をされていた」と思う。

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

◆カーキ色の荒い木綿の「モンペ服」も着せられた。配給の靴も、子沢山で足りず、いつも最後に家から登校する私は男靴だった。しかし、学校に着き、無くなったら困ると教室まで持ち込み友人に笑われた事など、子供ながらも一生懸命に生きてきた感がある。

時代の背景もあり、当たり前のように毎日落ち込む事もなく、友人に恵まれ楽しい学生生活が過ぎ去っていった。くよくよしない性格なのだろう。人生経験で、どんなことが起きても、その事を自分なりに良い方向に考え、豊かな気持でいられる性格は、「私の人生ありがたい！」と感謝している。

◆戦争とは、同じ地球上の人達が、お互いを殺し合い、美しい自然を、そして築き上げた文化遺産や財産まで破壊し合い、精神的にも傷つけ合って、何一つ良い事はない。絶対に戦争など起こしてはならない。

戦中・戦後のつらい思い出

山田 裕二（我孫子 在住） 1934年生

私は、昭和9年12月生まれの80歳です。昭和20年夏、国民学校6年生のとき、疎開先の秋田県大館市で、天皇陛下の玉音放送を聞きました。戦争終結を伝える放送は、大家の家のラジオからでした。当時、水桶を天秤棒で井戸から家まで運ばされました。その3年前、東京都足立区千住国民学校3年のとき、長野県湯田中のお寺に集団で学童疎開する話がありました。しかし、私は1歳年上の兄と一緒に家族と離れて、父の故郷である長野県善光寺近くの伯父の家に縁故疎開しました。

長野では1年近く暮らしました。東京の家族のもとに帰りたい一心で、学校が終わると殆ど毎日のように歩いて長野駅まで行き、改札口で列車の汽笛を聞いていました。ある日の夕方、東京に向かって1人で線路を歩いていたところを、鉄道員に保護されたこともありました。これは自分では覚えていない出来事ですが、亡き母が妻に聞かせていた話です。その後、昭和20年3月の東京

大空襲で東京都足立区の家が焼かれ、家族とともに母の実家がある秋田県大館市に2度目の疎開をすることになりました。秋田県は米どころなので食物には困らないと思っていましたが、現実には衣食住に悩まされました。私は6人兄弟の2番目ですが、弟妹の病気もあり、父母は大変苦勞したと思います。

戦後、東京に帰りましたが食糧難で、父の会社の電休日（電力送電がない日）を利用して、毎週田舎の農家に買い出しに出かける日々を過ごしました。帰宅の途中、せっかく手に入れた野菜や芋類を駅の検問で没収され、空身で帰らざるを得なかったつらい記憶が、昨日のことのようによみがえります。焼け跡に建てられた仮校舎の学校では、ノミやシラミを駆除するために生徒全員が頭から殺虫剤をかけられました。ノミやシラミが苦しがつて蠢^{うごめ}いていた姿が思い出されます。これらは、戦争で不自由を強いられた時代の私の体験です。忘れてはいけないことは、戦争は絶対にしてはならないことです。

敗戦後70年に

山本 栄蔵（我孫子 在住）1928年生

8月6日は、ヒロシマに原爆が投下された日です。この時は原子爆弾であることもわからず、新型爆弾と発表されました。そして間もなく8月15日、ガーガーと雑音ばかりのラジオで聞いた終戦の詔勅^{しよくちよく}は、内容が全くわかりませんでした。やがてどこからともなく日本が負けたらしいと伝わってきました。

当時、17歳の私は、勤労働員先の工場で何度テストしてもすぐに止まってしまう飛行機エンジンを作っていましたが、予科練を志願した1年上の友人には、特攻体当たり攻撃に飛び立った者もいました。

敗戦の知らせを聞いた私の感想は、“どうやら少し生き延びたようだ”という、なんだか拾いものをしたような感じで、“40歳ぐらいまで生きられたら十分だナ”と思ったことを今もハッキリと憶えています。ところがその日から今や70年、不惑もはるか過去となり、間もなく米寿を迎える自分にいささか

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

呆れています。

しかしあの戦争の日々、あたり一面、空襲の焼け跡の中で、黒焦げの小さな塊を抱いて泣いていた女の人の姿が今も^{まぶた} 瞼に焼き付いて忘れられません。どうしたのかなと思って近づいた私は、その小さな塊が赤ん坊だと判ってその場に立ち尽くしました。

この事だけは、誰かに伝えたい、みんなに知ってほしいと思って、つたない筆を執りました。

私の戦後70年

横山 敏博（久寺家 在住）1936年生

終戦の年、僕は国民学校3年生だった。昭和20年5月に父が徴兵された。その頃住んでいた東安市は、ソ連との国境から南下50km位の所に位置していたので、危険を怖れて早々に避難する人が多く、僕たち家族も荷物をまとめて牡丹江へと向かった。去った直後に、東安市はソ連の空襲にあい崩壊したらしい。追っかけ牡丹江もソ連の攻撃は必至で、更に集団で南方面へと逃げた。そこが終戦を迎えた最後の地の校河（調べたが不明）という場所だったと思う。

昭和20年8月15日の正午頃広場に日本人が集まり、天皇陛下の玉音放送をラジオで聞いた。その直後、日本人は1か所に集まり集団で避難した。沿道には、中国人をはじめ朝鮮人他外国人が大勢詰め寄り、各人が日本の国旗の日の丸が半分塗り潰された旗を持ち、大きな声で罵倒^{ばとう}する中を逃げた。

母は今年生まれた妹を背負い大きな荷物を両手に持ち、僕は泣きじゃくる弟の手を引いて集団について行った。ソ連軍の侵攻で壊された団地のような数棟の平屋の一部に入った。暗くなると土着民が日本人の物を略奪するために夜襲をかけた。年少者は砂を入れた紙袋を目つぶしとして応戦した。こんな生活が数日間続いた。少し生活が落ち着くと、避難していた集団は分散していった。

丁度この頃使用人だった張^{ちゃん}の世話で、弟は男の子の欲しい中国人の家に預けられ、妹も他の家に預けられた。母も断腸の思いで託したと思う。張の口利き

で、僕は農業を営む中国人の老人の所に、母は中国料理店の下働きとして住み込みで、家族別々に暮らすことになった。

この大地で中国語が話せない僕は、中国人と一緒に暮らす生活は非常に辛く、最初は母が恋しくて泣きたい毎日だった。仕事は、塀に囲まれた広さ一反歩位の畑の番人だ。朝6時ごろから夜は暗くなるまで、作物の見張りをする。昼ごろ老人が食事を持って来る以外は、1人で棒を持って見張りをするのが日課だった。一日中炎天下の中、1人で畑に座っておれば居眠りすることもあった。そんな時、中国人の子供達数人が野菜を盗みに来ることもあり、持っていた棒で追い払ったのである。また、不意に老人が僕の様子を見に来て、居眠りが見つかって散々怒られたりした。

食生活は、今でも思い出すが、大きな土鍋に黒豚の頭の部分を入れ水と塩を加えて数時間煮込んだものを、突っ突いて軟らかい肉のところを食べる。油っこく食べられるものではないが、他に何もないので我慢して食べた。残すと、その残り物が次の食事に出る。否応なしに食べるがとても辛かった。主食の高粱こうりやんは美味しくなくて馴染めず、お米のご飯が食べたかった。

母は、僕を心配して1週間に1度位だったと思うが時間を見計らって来てくれたが、直ぐ帰らねばならなかった。会った時の喜びも束の間、帰っていく母の後ろ姿に何回も手を振った。

こんな生活も束の間、満州の季節の移り変わりは早く寒さが来る。農作物の収穫も終わり、張の世話で市内と思うが豆腐店に移った。ここは前と違って家庭的に迎え入れてくれ、寝るところは豆腐作りの作業場の上だった。

豆腐作りは日本と同じで、夜明け前に、仕込んだ大豆を炊いてこれを驢馬ろばの動力で回す石臼で挽いていた。豆腐が出来上がるのは5時過ぎで、店売りは少なく市場に持って行くようだった。僕は毎日6時ごろブリキの大きなバケツに豆腐を20丁ほど入れ、近くの集落に行き「とうふあー、とうふあー」と大きな声を出して、1丁1円50銭で商売した。

昭和20年11月と思うが、妹の危篤きとくの知らせを張ちゃんから受け、僕と母は中国人の家に案内された。着いた時には、妹は土間に寝かされていた。暫くすると妹は息を吹き返し寝床に移され、悪くなると土間に降ろされ、こんなことが数

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

回繰り返されて息を引き取った。母も僕も悲しみで号泣した。次の日に母と僕は、張と中国人と一緒に近くの空き地に穴を掘り、妹を埋葬した。

終戦の翌年だったと思うが、日本人はソ連軍が俄かに作った強制収容所に移った。定期的ではないが、囚人部隊だという噂のソ連兵が見周りに来た。彼らの素行は最悪だった。目ぼしい物を略奪し女たちを連れて行くので、物は隠し、女たちは恐れて男装し丸坊主になったり、顔に釜戸の煤を塗ったりして難を逃れた。男たちの中にはソ連兵に反抗し連行される人もいた。見せしめのために、収容所の全員を運動場のような広場に集めて、その場で7～8人だったと記憶しているが、目隠しされて処刑された。心休まる時がなかった。

こんな不安な先の見えない生活が数カ月続いたある日、日本人引揚げの知らせが入り歓声を上げた。その後僕たちは号令に従い、集団で列車の方へ移動する。予め準備された列車は、全部無蓋車^{むがい}だった。

昭和21年夏、いよいよ列車が暑い最中動き出した。方角が全然解らず、本当に日本に帰れるのか、それともソ連の方に連れていかれるのか不安でいっぱいだったが、葫蘆島^{ころとう}に着いた。葫蘆島には既に大勢の引揚者が順番を待っていた。やっと乗船できたのは10月の中旬で、長崎の佐世保港へ向かった。船は貨物船で船床も甲板も講堂のように広く、各々が指定された場所に行く。途中玄界灘の大波（時化）で気分が悪くなるくらい揺れた。故国が見え安堵したのか、僕の傍に居た父子の父親が急逝した。船内には数名亡くなられた人がいたようだ。遺骸は船内に置くことも出来ず、船尾より海に葬られた。また、本土上陸目前に運悪く伝染病患者が発生し、全員頭から足まで全身にDDT消毒をした。船は約1カ月間佐世保の沖合に停泊していた。

11月27日やっと佐世保港に上陸できた。荷物検査や入国手続き等が済んで、指示された列車に乗り小田原を經由して箱根湯本駅に降りた。着のみ着のまま、ついに母の実家に辿り着いた。終戦からこの方、風呂の記憶もなく顔すらあまり洗ったことなく、どんなに汚く汚れた顔、身体だっただろうと思う。直ぐに大衆浴場に連れて行かれやっと家に入れてもらえた。嗚呼、これで日本に帰れたのだと実感した。

色々なことがあったが、戦後70年平和を守ってきた日本は、これからも永遠に平和を続けてゆくことを、強く願っている。

疎開先での戦争の日々

吉広 誠一（天王台 在住）1937年生

昭和20年8月15日前後の、朽ちかけた戦争の記憶を辿ります。昭和19年11月、当時国民学校1年生だった私は、母と弟2人の4人で、千葉県木更津市近郊の農村に疎開しました。米軍の爆撃機が飛来するようになったのは、翌年3月頃からです。東京の都市部を爆撃して、帰るときの通路にあたっていたからだそうです。空襲は決まって夜の8時頃でした。サーチライト（探照灯）で照らされた米軍機が、東京市街地の上空を左右に飛び回るのが手に取るように見えました。それを狙って、地上から高射砲で迎撃するのですが、一向に命中しませんでした。日本軍が打ち上げる照明弾が花火のように見えました。

3月10日のことだったと思います。東京の夜空が赤く染まっていました。これを見て、「この戦争は負けだな」と呟いた人がいたのを覚えています。2km位離れた山中に、米軍機が墜落したことがありました。夜なのに辺りが一瞬、真昼のように明るくなりました。程なく、米兵1人が捕まったという噂が伝わってきました。農家の庭先に静かに現れたのを保護したとのことでした。沢庵と味噌汁の食事を出して3日間勾留した後に、憲兵がきて目隠しをして連行していったそうです。戦後間もなくして、捕虜になったこの米兵が農家にお礼にきたと云う話が伝わってきました。あの日、東京を火の海にした米兵の1人であり、捕捉された庭先で何が起きても不思議ではない状況だったのです。しかし、ここでは憎しみの連鎖は起きませんでした。お礼にきた程ですから、人道的な扱いをされたのだと思います。

4月になると、米軍機は昼間の11時頃、飛来するようになりました。住ん

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

でいた辺りは爆撃されないのですが、米軍機が飛来すれば空襲警報が発令されます。その後は、授業中止で帰宅するか、または竹藪に避難することになります。その頃、特攻隊に志願した村人がいるという話を聞きました。すごい人がいるな、と思いました。その特攻隊員が乗った飛行機が自宅の上空に飛来して、3回旋回した後、帰っていったそうです。8月に入ると、米軍艦載機が低空で飛来するようになりました。住民を脅かす大きな轟音をたて、我が物顔で連日來襲しました。撃たれるかと思うと、空を見上げることもできないほどでした。終戦の日の8月15日は、風も雲もない青空でした。昼頃、母屋のラジオの前に、10人ぐらいの人が玉音放送を聞くために集まってきました。終わると、全員が無言で立ち去りました。母に聞くと、「負けた」と一言、敗戦の衝撃は大きかったのだと思います。

戦争が終わり9月1日の始業式の時、校長先生は「日本は戦争に負けた。米軍が来たら、女は山に隠れるように」と言われました。しかし、このような耐えがたきを耐えねばならないような事件は、実際には起こらなかったと思います。当時住んでいた村の近辺では米兵を見たことはありませんが、木更津市内ではよく見かけました。米軍が、木更津海軍飛行場を使用するようになったからです。米兵は威張ったようなところはなく、怖いというより大人しそうな人達でした。占領が不祥事続きでは将来に渡って日米の友好関係を築けないので、米軍側も細心の注意を払っていたのでしょう。不祥事を起こさないような規律正しい人達で、進駐軍が編成されていたのだと思います。

村出身の特攻隊員は、無事に復員しました。しかし、その後、グレて無法者になったという話が伝わってきました。それを聞いたとき、あんなに立派だった人が何故だろうと思いました。終戦を境に、世の中の価値観や生活環境が一変しました。特攻隊員には、その変化が特に大きく感じられたことと思います。世の中の変化を素晴らしいと思い、戦後日本の再建を決意した人もいれば、それに付いて行けず自暴自棄になってしまった人もいたでしょう。いずれにしろ、戦闘機のパイロットですから、特攻隊員は優秀な方だったでしょう。その後の

消息は聞いていませんが、途を外れたのは一時的なことであり、社会人としてきっと活躍されたことと思います。

私の戦中体験記

吉見 俊彦（久寺家 在住） 1931年生

昭和20年8月の終戦時、私は14歳で旧制中学2年生だった。茨城県立日立中学（現・日立一高）である。日立市は茨城県北部に位置し、海岸に近い地域には当時の軍需工場としての日立製作所日立工場、山側には東洋一の煙突精錬所があった日本鉱業（現・JXホールディングス）日立鉱山がある、日本有数の鉱工業都市であった。

昭和19年“太平洋の旭光をうけて”の校歌練習から春4月、日立中学の1年生が始まった。3月インパール作戦、6月サイパン失陥、7月東条内閣総辞職、10月レイテ沖決戦と、今から思えば日本は敗戦への道を転げ落ちていたが、中学1年生ではそうした情勢はわかるはずもない。“鬼畜米英”のかけ声のもと、午後は毎日ほふく前進からの劔突き、太平洋を漕ぎ渡るという格好を繰り返しての教練に大半の時間が費やされた。入学当初は若い配属将校であったが、間もなく壮～老と変わり、また教練用の何人かに一人かの本物の小銃も、何時の間にかすべて木銃に変わってしまっていた。

昭和20年は日本敗戦の年であった。2月米軍硫黄島上陸、3月東京大空襲、4月米軍沖縄上陸、8月広島・長崎原爆投下。そして8月15日無条件降伏となるが、日立もこの間大惨劇を受けた。6月10日、B29による日立製作所工場爆弾攻撃（来襲したB29は4波に分かれて延130機。1トン爆弾800発）。7月17日、米艦隊による日立山手・鉱山地区艦砲射撃（16隻からなる米第3機動艦隊）。7月19日、日立市街焼夷弾攻撃（B29・128機、焼夷弾971トン投下、中学校焼失）。

6月10日爆弾攻撃の日、私は中学校への通学途中であった。工場横をほぼ

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

2 km歩く毎日だが、この日は工場角地にかかる200m位のところで空襲警報、上を見上げると既に敵機が何機か見えていた。路上横高台にあった日本軍の高射砲陣地の兵隊が「ぼく、早く防空壕に入れ」と声をかけて来たので、すぐ路上脇の横穴に兵隊達と一緒に飛び込んだ。

その直後、地軸を揺るがし大地が飛ばされたような爆発音で、横穴防空壕も地崩れが始まった。「早く外へでろ」との声で、崩れかけた防空壕に穴を開けて外に出て来たが、気が付くと私の帽子は吹き飛ばされ、上着もずたずた破れであった。私はそのままそこから数百米ほど離れた自宅まで、何をわめいていたかわからないが、泣きながら戻り自宅前の防空壕に入った。その時の両親の涙顔を覚えている。

その工場近くの横穴から出て来た時には、馬車馬の死体（人も死んでいたのだろうが、馬の方が大きいため、この記憶しかない）がゴロゴロしていた中を泣きながら走っていた。正に九死に一生を得た事が思い出される。

その数日後からは、勤労働員として工場惨地のあとの破壊建物の整理とともに、人馬の死骸処理をやらされた。正にこの世の地獄絵をみる様なものであった。特に人の死体を2人で1つのタンカに乗せて、1 km先の山の中の臨時焼き場まで泣きながら何回か持ち運びを往復した事も忘れられない。

高台にあった家から、真夜中の水平線を真赤にして、爆音相次いだ一斉艦砲射撃が見えた。すぐ庭にある防空壕に入ろうとして腰を上げると、頭の上をビューンビューンと砲弾の音がするため、まったく動けずただおびえているだけであった。

焼夷弾攻撃の日はその直前の昼間に、“今晚は日立を攻撃する。一般市民は退避せよ”との米軍のビラがまかれているとの噂が立っていた。ただそのビラに触ると毒がついているとの話もあったものの、私達親子4人は1 km位離れた山の中のお寺の防空壕に、夕方から避難していた。ビラの通り真夜中に焼夷弾攻撃が始まり、山の中から見えた街中は真赤に燃えていた。焰火に映っている空を見上げると、敵機からまず1発が見え、それがすぐ5～6発に分れ、さらに細分化されて10数発となって、正に夜空に花火が散る形で市街地に落下していった。翌朝、「貴方の家は焼け残っている」との話から、父と2人で山

から降りて家に入ったが、その時に奇蹟を感じた。それは仏壇の前に、数日前病気で亡くなった私の兄の遺骨と並んで、葬式のあとの山積みに重なった座布団があったが、その上に屋根を突き破ってきていた焼夷弾が不発弾として乗っかっていた事である。六角形で直径6cm位あったかと思うが、父と一緒にその不発弾を外の道路に投げ出したが、とにかくこの事は、今もって亡兄が家を守ってくれたものと信じている。

校舎が全焼してからは朝の点呼のために登校したあとは、現在の原子力研究所のある東海村の海岸砂浜で、米軍上陸に備えてのタコツボ掘りの毎日であった。我々の掘っていたタコツボは1番水際に近く、1人1日で人間が入り込める程の深さの穴を掘る作業だ。その後方の松林の中には、コンクリート製のトーチカ風のものを兵隊が作っていたが、大砲を置いて動かすレール様のスペースがあった。その兵隊の指導のもと手榴弾しゅりゅうだんの投げ方を教わっていた。つまり米軍上陸接近時には、我々1人1人が自分の掘った穴にもぐり込むという形だったと思われる。現にこの地域は米軍上陸の有力地点であったとされている

なお、現在この東海村までは日立から汽車で3駅だが、何回も敵機の機銃掃射を受けた。敵機発見と同時に汽車は止り、我々乗客は急いで客車とレールの間にもぐり込む事を繰り返した。敵機の機銃弾が線路をかすめて何十発と打たれた。客車の窓は破壊されていた。

8月15日の終戦のラジオ放送は焼け残っていた家で聞いた。よく聞き取れなかったが、“負けたらしい”とのざわめき声で、何か虚脱感だけが残り、その日のその後の行動はどうしたのかほとんど記憶にない。

中学2年生の勤労働員としては、工場内資材の運搬や、弁当持ち運び、常磐線本線から鉱山電車への鉱石の積み替え降し、選鉱場での手伝いなどいろいろあった。最も多かったのは防空壕掘りの手伝いと、その防空壕用の材木切り出しを山中で行ない、あと街まで2人で何本か担いで持っていく仕事である。

ある時、山の中で、白煙をあげる敵B29爆撃機からパラシュート（乗務員脱出用）が落下するのを見て、ナタやノコギリを手に持ったまま、皆で山を駆け降りた。我々は畑に落下して来たパラシュートを囲みながら近づいた。パラ

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

シュート落下兵は始めの内はピストルを空に向けて撃っていたが、その内にそのピストルを地上に投げ出した。その頃に日本の警官隊が到着、遠巻きから次第に近づいて逮捕した事を覚えている。

捕虜といえば、鉦山近くの小学校の校舎の中に白人系の捕虜収容所があった。その校庭には大きな赤十字のマークが置かれており、それを目標に数日ごとに米軍機（赤十字マーク付き）が食糧と思われる資材を投下していった。このマーク付き飛行機には日本側も攻撃しなかった。

またここの収容所の白人捕虜達は、鉦山のトロッコ押しなどの作業が主だったようだが、日曜日は休みである。休みには捕虜達を日立の海岸まで何十台からのトラックに乗せて行き、海水浴をさせていた。沖合100mぐらいの所にロープを張り、何隻かの監視船で見張りはしていたが、我々も小銃を持った日本兵と一緒にその見張りを手伝った事もある。

そして終戦直後の混乱。まだ米国進駐軍が日立に来ていない頃の話。焼け跡の日立の市街を数日間にわたって朝鮮人（現・韓国人）と支那人（現・中国人）の武装集団が対立して、無警察状態の中で、街中が騒乱状態となった。鉦山労働者としての韓国人と、その支配下で特に過酷な労働を強いられていた捕虜としての中国人との間の争いである。日本の敗戦での“勝利者気取り”で双方とも集団を組んで街中を練り歩く中に、鉦山労働の扱いをめぐっての大激突になっていったと思われる。日本の警察は全く手を出せないまま、逆に警察署は青天白日旗で占領されるといった不穏な状態が続いた。時には発砲騒ぎもあり、我々もそれを遠くから見ているだけだった。こうした事件を見て、大日本帝国が敗戦国日本となった現実を漸く実感した事を覚えている。こうした状況は、米国進駐軍の到来によって、この面からの不安は取り除かれていった。

戦争を恨む

渡辺 正夫（我孫子 在住） 1939年生

我孫子市立第四小学校で学校評議員をしていたおり、幾度か学校給食を戴いたことがありました。その都度、「こんな給食を食べ、勉強ができる今の子供達は何と倖せなんだろう」と感じると共に、羨ましくもまた妬ましくさえ思ったものでした。もしもやり直すことができるとしたら、この平和な空気のなかでこんな給食を食べ、色刷りのきれいな教科書を手し、完備された教室で小学校の1年生からもう1度勉強をやり直したいと思ったことも事実です。

私は、昭和14年（1939年）ヨーロッパで第二次世界大戦が始まった年に、新潟の農家の三男として生まれました。当時、すでに日本陸軍は中国大陸へ侵攻し、「兵隊さんの為に」とばかり米の供出制度が敷かれていました。自分の家で取れたお米であっても自由にはならず、強制的に取り上げられて、あとに残った米や粟、稗の雑穀で飢えを凌ぐほかはありませんでした。白いご飯を食べられるのは年に数回のみで、お正月やお盆やお祭りのごく限られた日だけでした。普段の食べ物は、もっぱら「コナカキ」と言われていたものでした。コナカキは、米糖にさつま芋やその蔓つるの他、その時々食べられるあらゆる野草と一緒に煮込んだどろどろとしたものでした。塩や砂糖の調味料など全くなかったので、味のない今にして思えば家畜の餌としか言いようのないものが、毎日毎日の主食だったのです。

当時、食べることの楽しみと言えば、日頃私達子供が餌をやったり、面倒を見たりして飼っていた鶏や兎を絞めて、正月やお盆や特別の来客の時に振舞いご馳走することでした。しかし、その朝まで餌をやって可愛がっていた鶏や兎を絞める時のせつない気持、肉となり口へほおばった時の美味しさの矛盾した複雑な気持は今でも生々しい記憶として残っています。このような過酷な食糧事情のなかで、私の歳上に女の子、私の歳下に男の子と女の子が、1歳の誕生日を待たずに栄養失調で亡くなってしまいました。私が社会人となって1人暮

第1部 平和祈念文集

<次世代に伝えたい戦中・戦後の体験>

らしを始めた頃、母が「あんな食料の無かった時期、お前だけよくぞ生き残ってくれた」としみじみと言った一言を、76歳を過ぎた今になっても忘れることができません。

私が小学校へ入学したのは昭和21年、敗戦の翌春で、まだ国民学校という厚い看板が校門にかかっていました。校庭は耕され畑となり、天気がよくても遊ぶのは屋内運動場ばかりでした。教科書といえば姉の使った「おさがり」で、所々墨がぬってあって見るからにみすぼらしいものでした。2年生になると教科書は、新聞の見開き大の印刷物を渡され、家へ持ち帰りおふくろに裁断のうえ木綿糸でとじて貫うと、教科書らしくなったのですが、なにしろ紙質がワラ紙のようなもので1学期を終える頃にはぼろぼろとなる始末でした。学校でのお昼は、給食など勿論ない時代。それぞれ弁当を持って登校するのですが、白いご飯の弁当を持って来る子供などは極々まれで、大豆や芋などを混ぜて炊いたご飯の弁当を持って来る子供はまだまだましの方で、蒸芋が弁当箱に入っていた子供も珍しくありませんでした。栄養士が食材のカロリー計算をした献立に添った給食を食べている今の子供達には、想像することさえできない事かと思えます。

今年は戦後70年、戦争体験者が年々少なくなっているなか、歴史をないがしろにした不穏な空気を感じる昨今、元をただせば、全て戦争に由来する貧しかった子供の頃の生活が甦ります。戦争は戦場で銃火と対峙する兵士や戦火の下で逃げまどう人達ばかりだけではなく、一見平穏で長閑な平和そのものに見える田舎おびやに生まれた子供の生活までも脅かし、生まれたばかりの幼い命までも情け容赦なく奪い取ってしまうのです。私は戦争を憎み、恨む。